
神特究

きらきら星

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

神特究

【Nコード】

N4088D

【作者名】

きらきら星

【あらすじ】

世の中から拒絶された五人の天才。彼らは新たな人類を作るべく神の実験を許可された。彼らは神か悪魔かそれは貴方の目で確かめてください。（この連載は中途半端な形で連載を終えています）

パブロフドール 実力者達の計画（前書き）

注意してください。飲み込まれる恐れがあります。
小さなお子様の目のないところで読んでください。
これを読んで新しい道を見つけても一切責任は取りません。

パブロフドール 実力者達の計画

人間はこれ以上進化できない。

人間が二足歩行を始めた時からそう決まっていた。

二足歩行を選んだ人間はこれ以上大きな脳を手に入れることができない。

もしバスケットボール台の脳を持って生まれてくる子供がいるならその子は母親の腹を引き裂いて生まれてきた。

そんな冗談が僕達の今のブームだ。

コンビニの袋を大量に持って大学の門をくぐり一番新しい建物に入る。地下へ階段で下り別の階段を登ってそこにある特別なエレベーターで地下三階へ降りる。

三種類のIDカードを使って三度ゲートを通る。

最後に声門、網膜をパスしてようやく研究室の扉の前だ。

虹島医療福祉大学精神科第七特別研究所。別名『神特究』ここが僕の職場だ。

表向きは子供の精神についての研究所。だが裏は……

「帰ったぞー」

黒塗りの大きな実験台を四人の同僚が囲むように座っていた。各々好きなことをしている。一応ここは職場なのだが一日の大半をここで過す彼らだ。私物が部屋を埋め尽くしていた。

「おう、遅かったじゃねえか。カップラーメンあったか？」

彼の名前は五十嵐風真、生物専門の元大学教授。日本最年少と話題になったが人間の遺伝子実験が原因でここに来た。

「昨日より5分32秒遅くなってる。平均と比べると4分22秒：罰金！プリン追加！」

彼女の名前は斎条桜、この大学の元助教授。精神科医としても優秀な彼女だったが薬物が人間に及ぼす実験を患者全員に施した経歴

がある。

「よいではないですか。私達の買い物を代表で行ってくれているのですから。ということで私はボールペンをお願いします」

この中の最年長の御波聖雅、優秀な外科医だった彼だが死んだ人間に生きた人間の臓器移植を試みたためここに来た。

「そうだ修司、今度はコーヒー豆よろしくね」

彼女は椎名瑠奈、彼女は生命の進化や変化を研究していた学者。

世界初の人間と動物のキメラを作り出した実力者だがその物に人権があるのかなどの問題でここに来た。

「てめえら、たった今帰ってきたばかりだろうが！いつも言うが要求は一度に言え。ここまで来るのがどれだけ大変か分かってるのか！」

「じゃんけんで負けたんだから文句言わないの。あと、シュークリムも追加ね」

「たく、明日だ。明日。とにかく実験始めっぞ」

そして僕、中本修司。危険物質専門で薬物もやっていたが特に好きだったのが放射能実験だ。その実験でしくじってここに来た。

実力はあるが世の中が受け付けなかった僕達五人。

影で天才と呼ばれていた。

だが世間は僕達をマッドサイエンティストと呼んだ。

神特究の裏の顔それは『人類人工進化計画』だ。

裏の政府に作られたこの組織は国から莫大の投資があり許されない実験をすることができるところだ。

内容は今より数段上の人類を作り出すこと。IQ200や常人離れた記憶力など程度の低いものから動物と同じ身体能力を持った人間を作るなどがある。やることは沢山あるのにこの人数は不満がある。

「それじゃ、パブプロドールの状況を聞こうか」

パシリの僕だが一応ここの最高責任者だったりもする。

パプロフの犬をご存知だろうか。犬にえさを与える時ベルを鳴らす。それを習慣化していつて最後にはえさが無いのにベルを鳴らすだけで犬がえさを食べる時のようにだれを出すあれだ。ちなみにドールとは人間の子供のことだ。

「対象ドールは10体。全てアルティメットドールを用意した」

五十嵐の報告に皆が驚いた。

アルティメットドール。僕達は縮めてアルドールとも呼んでいるそれは『究極の子供』という意味だ。

昔こんな実験があった。無作為に選ばれた10人の3歳児。そのドールを大人や親から離れた所に隔離して育てることにした。行き届いた教育、食事、環境。当初の計画では20歳になることには世界一の天才ができると言われていた。だが、全てのドールが16歳で死んだ。その実験で得たことは成長には愛が必要だということだった。

その表の発表と現実が違う。実は一人生き残っていた。それがアルティメットドールだ。

「アルドールが10体も…よくそろえられたものです」

「まーな、でも五年しか調整されていないのが傷なんだがな。今回の実験にはちょうどいいだろうよ。雄雌混合の14歳から16歳だ。内容は斎条よろしく」

「はい、10体同じ空間での生活1体に3畳の空間を壁で仕切られた部屋を与えるの。でも天井が無くて全ての部屋の声はすべてのドールに聞こえる。その部屋の出入りは21時から7時の間だけそれ以外の時間全てのドールは広い共有の場で過す。そして一時間おきに空間の色を変える」

斎条の説明はこう続いた。

空間全体を一色に染めその色に応じたことを体験させるというものだ。

青色なら勉強。

緑色なら食事。

黄色なら自由時間。

赤色なら悲劇の映像を流す。

それを習慣化して行きどうなるか実験するのだ。

「以上です」

「よし、なら始めようか『神に特別に許された究極の実験』を」

パブロフドール 実力者達の計画（後書き）

ダークを書きたいのでこんなのも始めようと思います。

投稿は『演劇団長』優先なのであまり期待しないでください。
でも、豚なのでおだてられると急いで書くかも…

パブロフドール ドールの違い

小さなモニターが沢山と大きなメインモニターの前に僕達四人は座った。

モニターに映されているのは白い部屋だ。小型には各個人の部屋、大型には共有の広場が見えるようになっていてる。

「よし、五十嵐入れてくれ」

白い壁が開きそこから白い服を着たドールが次々入ってきた。胸と背中番号が書かれている。

目隠しをされているせいだろう皆大人しく指示に従っているようだ。

最後に入ってきたのが五十嵐だった。彼は10体のドールの前に立った。彼の横には聞かされていない11体目のドールがいた。

「おい五十嵐なんだその11番は」

五十嵐はカメラに向って苦笑いをしていた。

「悪い悪い、こいつは『キメラドール』だ。斎条にも椎名にも許可を貰ってるからさ」

キメラドール。文字通り複数の遺伝子を持った子供のことだ。見た目からして普通のドールと変わらない。だが、キメラドールには普通のドールとは異なる身体能力を持っていることが多い。

「そんなイレギュラーな危険分子を実験に入れるな！」

「大丈夫よ。もしもの時はこれで」

椎名は数あるボタンの中の黒いボタンを押した。

「うーうあああ、ぐがあああ」

キメラドールは悲鳴を上げ体が複雑に曲がり不気味な音がし始めた。

「背骨に少し細工をしてあるから鎮圧は簡単なのね」

「ならいいけど…何故そんなものを入れた」

「調教期間が短いとは言え相手はアルドール。赤の刺激は強くして

おいた方がいいでしょ」

この計画の全権は斎条に任せている。斎条がそう決めたならそれに従っただけが……

「五十嵐君、5番の様子を見てもらえますか」

今まで黙って流れを見ていた御波がマイクを握った。

「お、おう」

全体に目隠しを取るように指示をだした。その中の5番だけ様子がおかしい。

「どうした5番」

「なんだよ今の悲鳴は、ここはどこだ。お前は誰だ！」

他のアルドールには見れない反応を見せた5番。僕はこれに似た反応を見たことがある。確か、アルドールを調教する当初の時だ。

「おい五十嵐、そいつ『ただのドール』じゃないのか」

「さすが修司。そ、あれはただのドール。そこらへんにいたのを拉致ってきたの」

平然と斎条が答えた。ただのドール。つまり一般人の子。もみ消すのは厄介だぞ。

「斎条分かってるのか」

僕はこいつらの上に立つ責任者だ。責任の重さよりもこいつらを守るという義務もある。

「分かってる。病院側には様態が安定していたけど急死したってことにしてもらった」

「親族は」

「ドナー登録していたから骨だけでいいって、二ヶ月待ってもらってる」

斎条は白衣のポケットに手をつ突っ込んで真剣にモニターを見ている。彼女の今回の実験に対する熱意は今までとは群を抜いて高かった。パブロフドールを完成させることが彼女にとってどれだけのものか知らないができるだけ助力しよう。

「飴舐める？特別にプリン味あげる」

「お前どこまでが本気が分からないよな」

「私はいつも本気だよ。それじゃあ五十嵐君出てくれるかな」

五十嵐が部屋を出て斎条がモニターの前に座った。

そして、実験が始まった。

「みんな私は桜よろしくね。これからここで生活してもらいます。

こちらの指示に従ってもらうだけでよいので後は自由にしてください。質問は？」

待っていたかのように5番が質問と言うより騒ぎ出した。

「おめーだれだよ。なんで連れて来たんだよ」

「君は物事とを理解しようとしなのかい」

7番のアルドールが落ち着いた声で5番に問いたずねた。

「ああ？」

「彼女は桜と名乗った。私達にここで生活してもらうために連れてきた。彼女は貴方の要求には既に答えていたということですよ」

3番が説明した。どうやら5番以外は本物のアルドールのようだ。

「お前らなに冷静になってるんだ！拉致されたんだぞ」

「騒いだ所で出してもらえないわけでもないだろうに」

「私も4番さんの意見に賛成ですね。桜さんとは初めてではないので彼女は情で動く人ではないと分かります」

1番は斎条のことを知っている。アルドール作りのとき斎条が立ち会ったのは珍しいと思うがそれが来るとは…

「お前らおかしいぞ」

「はい、5番君。騒ぐのはもう少し後にしてもらえるかな」

斎条の声に5番を含めた全員が固まった。当然だ、さっきの柔らかい声とは違って深く怒りがこもった斎条本気モードの声だからだ。

「D、聞いている？」

Dと呼ばれて11番が顔を上げた。雌の高校生ぐらいだろう。他のアルドールとは違い目が赤い。それより目立つのが髪だ。生え際は白いのに毛先は赤い。癖だろうか指の関節をコリコリと鳴らしな

がら指を動かしている。その指から伸びる爪は鋭く長い。

「はい」

小さな声だがしっかりと聞こえた。それに満足した斎条は赤のボタンを押した。

白かった部屋は真っ赤に染められた。

「D、命令する。どれか一つ食べ」

すぐだった。Dの隣にいた10番は喉から腹にかけて引き裂かれた。

Dは10番の心臓を取り出し犬歯をむき出しにしてそれを食べ始めた。

「な、なにやってるんだよこいつ」

驚いたのは5番だけだったようだ。

「Dはキメラドール。その中でも立ちの悪い人食の素質を持っている。これから部屋が赤く染まった時、Dが一番近くにいたドールを狩ることになってるの」

斎条の説明中でもDは一心不乱に10番のものを食べ続けた。

それを見ていた5番が嗚咽し始め他のあるドールは何事もないかのようにそれを見ている。これが普通とあるドールの違いか…

「はい、D、やめなさい」

斎条の命令を無視してDは食べるのを止めない。

「やめなさい」

「ぐう、あ、ああ、ぐはああ」

あの黒いボタンを押してようやくDは止まった。

Dは天を見上げたような姿勢で固まっていたが目に生気が戻った途端食べていたものを全て吐き出した。

「それではしばらくの間自由時間ね。はいばい」

部屋を薄い黄色に染めて斎条はマイクのスイッチを切った。

黄色より白に近い部屋の真中には赤い穴が開いたかのようなあと

が残っていた。

パブロフドール ドールの違い（後書き）

早くも一人…ですね。

パブロフドール それぞれの命の重さ

「おい、大丈夫か、しつかりしろ」

俺は抵抗の無い肉の塊を必死に揺すっていた。

「死んでいるに決まってるだろ」

「何だと」

俺の後ろに立っていたのは7番の男だった。

そいつはまるでごみを見るかのような蔑んだ目で俺を見ていた。

「まさかだと思うけどお前、これが最後に何か言い残して息絶える
とでも思ってるの？」

「貴様！」

嘲笑うそいつの顔を俺は本気で殴った。だがそいつは顔の向きが変わっただけでその場所に立っていた。

「暴力ですか……やれやれ、やはり貴方はイレギュラーな存在ですね！」

肩に足を掛けられ片足で床に叩きつけられた。

頭を踏みつけられている。悔しさよりも目の前にある死んだ人間の顔から受ける恐怖の方が強かった。

「やめなさい、ジーベン。イレギュラーとは言え彼はフュンフをもつ。我々と生活を共にする者だ。いろんな因子がいるから実験なの
だろ」

「俺がジーベンか…なかなか気に入った。フィアに免じてこれでチャラにしてやる」

足がどかされジーベンと呼ばれた男は部屋の隅に歩いていった。

壁際にいるフィアという男4番は俺に微笑を向けて部屋中を歩いていた。

「大丈夫？フュンフ君」

俺のそばにしゃがみ込んできたのは3番の女の子だ。何故だろう、冷たい空気を感じていたのに彼女からは暖かい日の明かりを感じる。

「ああ、ありがとう、ええ、と……」

「ドライ、よろしくね。フუნフ君」

ドライ？それに俺のことをフუნフ？

「さつきから何？その呼び方」

「はあ？おいおい、ただのドールは教育が足りんと聞いているがここまでかよ。傑作だな」

8番は俺を指さしながら笑い始めた。何故笑われているのかは知らないが確実に馬鹿にされている。

「もう、アハトそんなこと言わないの。あのね、ドイツ語での数え方で貴方は5番だからフუნフなの」

3番、ドライが優しく丁寧に1から11までの数え方を教えてくれた。とてもじゃないが一度では覚えられなかった。

だが、俺の目に入った光景は一つだけすぐに言えるようにならないといけなくなった。

「おい、ドライだっけ？9番はなんていうんだ」

「へ？ノインだけど」

10番を引き摺りながら部屋の隅に向っているノインの元へ走った。

「おい、ノイン何してるんだ！」

ノイン、女の子だ。日常通りという瞳が俺を見ていた。彼女は当然のように。

「ごみは捨てるの」

彼女が指さす先には焼却口と書かれた鉄の扉があった。

「ごみって…お前！」

「そのままにしておくとか臭くなるし汚いから処分する」

「俺も賛成だ。フუნフ周りを見てみる」

周り？ジーベンに言われるまま見てみるとみんなノインのしょうとしていた事に賛成しているようだ。

「お前ら可らしいぞ。目の前で人が死んだんだぞ。何も思わないのか！」

沈黙が答えか…、その中ジーベンが話し始めた。

「5人だ」

「？」

「俺が前までいた施設で一週間で死んだドールの数だ」

「ドール？」

「私達みたいな子供のことだよ」

ドライが補足をした。子供？一週間で5人の子供が死んでいただと。

「他の奴らはどうかは知らないが俺がいた施設は初めは100人いたドールが最後には俺一人になっていた。つまり俺は99人の命が犠牲になってここにあるってわけだ」

「私やここにいるみんなそう。いつ死ぬか分からないそんな日々を過して最後まで生き残った。沢山の命を背負って行き続けているの、フュンフにもツエーンの背負っていたのを背負う義務があるんだよ」
こいつらは命を大切にしているのか？それならさっきの行動は矛盾している。

「だから、一つや二つでぎゃあぎゃあ騒ぐなってこった」

アハトが皆を代表して率直な意見を出した。つまりこいつらはこんな光景日常どおりで人が死ぬのは当然だと言っているのか。

「お前ら…おかしいぞ！命の大切さを分かっているのか」

変えてやる。こいつらのいかれた考え方を変えてやる。

「言った。こいつ言いやがった。馬鹿じゃねえの。教科書通りの説教ありがとさん」

なんだこのアハトの反応は…まるで俺がそう言っていると分かっていたかのようなだ。アハトだけじゃない。周りみんながそうだ。

「おい、フュンフ。百歩譲って俺が言いすぎたでしょう。ならお前は1秒に約2人が死ぬことはどう考えている」

「なんだよそれ」

「私たちがここに入ってから大体2時間、7200秒が経ってる。アハトが言っているのは正確には『世界では1秒に1.8人が死ん

でいる』という事、つまり私達が出会ってから世界では12960人が死んでいる計算になる。その中の一人がたまたま目の前にいただけ、確立の問題」

6番、ゼックスの女の子が面倒臭そうな声で教えてくれた。

「もういいかな。これ、捨てるよ」

とっている割には既にはほとんどを捨て終わっている所だった。

「お前ら変だ！おかしいぞ！たまたま？確立？1秒？だからなんだよ。死ってそんな簡単なもんじゃねえだろうが！」

「おうおう。吠えろ、吠えろ、おもしれえなお前」

「なんだとアハト」

「俺に噛み付くなよ。悪いのはエルフだろうが」

エルフ、11番のあいつか。部屋の隅で蹲っているそいつに俺は近づいた。文句を言いたいからか説教したいからか分からないがとにかくあいつと話さないといけない。そう思った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4088d/>

神特究

2010年10月8日15時34分発行